

ナラティブ分析を再考する*

——構造への注目——

矢 崎 千 華**

1. はじめに

ナラティブ¹⁾への関心が払われるようになってから久しい。とくに個人のナラティブへの注目を近年の潮流としてあげることができる。社会学におけるライフヒストリー／ライフストーリー研究や生活史研究などはその一例であると言えるだろう。また、教育学においては児童・生徒の物語能力 (Narrative Competence)²⁾の重要性について指摘が行われている。社会科学・人文科学の諸領域だけではなく、医療においても Evidence-Based Medicine (EBM) から Narrative-Based Medicine (NBM) への展開の動きがあり、臨床研究の中で個人のナラティブが注目されるようになっている³⁾。

本稿の目的は、このようなナラティブをめぐる動向を踏まえ、ナラティブ分析を再考することである。ナラティブ分析は、人びとのかたまりを分析するという側面から質的研究法のひとつとして位置づけられる。ここで言うかたりは、主に日常会話やインタビュー調査の内容を指す。しかしながら、ナラティブはいたるところに存在する。バルトはこのような状況について以下のように記している。

物語は、神話、伝説、寓話、おとぎ話、短編小説、叙事詩、歴史、悲劇、正劇、喜劇、パントマイム、絵画、焼絵ガラス、映画、続き漫画、三面記事、会話のなかに存在する。そのうえ、ほとんど無限に近いこれらの形をとりながら、あらゆる時代、あらゆる場所、あらゆる社会に存在する (Barthes 1966 = 1979 : 1)。

ナラティブを「物語」に置き換えてみなければならないが、この「リスト」にはまだまだ加筆ができそうである。それほどに私たちはナラティブのなかにある、あるいは、ナラティブとともに生きている。ナラティブを分析するとは、私たちの「生」そのものを分析することと考えてもよいだろう。

C. リースマン (2008 = 2014) は、ナラティブ分析を「テーマ分析」「構造分析」「対話／パフォーマンス分析」「ヴィジュアル分析」に分類し、各分析の代表的研究と位置づけられるものを取り上げて紹介している。本稿で取り上げるナラティブ分析は、ナラティブの構造に着目するもの——構造的ナラティブ分析 (上記の「構造分析」)——が中心になる。というのも、後述するようにナラティブ分析はこのアプローチからはじまり、

*キーワード：ナラティブ、ナラティブ分析、構造

**関西学院大学大学院社会学研究科研究員

- 1) 本稿で取り上げるナラティブは、基本的には個人のナラティブ (personal narrative) である。ただし、物語論に言及する場合におけるナラティブおよび物語はこの範囲だけではなく、広く聖書や文学作品などを含めたものとして取り扱うこととする。
- 2) 本稿で取り上げる英文の文献の用語、とくに物語論との関係が深い用語についての翻訳においては、Prince (2003 = 2015) を参考にした。
- 3) 医療の臨床現場におけるナラティブを中心にした実践はナラティブ・アプローチとして知られる。詳しくは、野口 (2002, 2005) および野口編 (2009) を参照されたい。今日ナラティブ・アプローチの中でとくに注目されている実践は、精神科医療におけるオープンダイアログである (Seikkula and Arnkil 2006 = 2016)。

その展開の過程を見ることが本稿の目的のために適しているからである。

ナラティブ分析の歴史を追いながら、ナラティブがどのように扱われてきたのか、そしてナラティブ分析がどのように変遷してきたのかを振り返る。本稿ではナラティブ分析とそれに関連する研究を配置しなおしつつ検討していく。この多少まわりくどいと思われる作業を通じて、ナラティブ分析において構造に注目する意義について論じていく。

2. ナラティブの定義をめぐる問題

2.1 ナラティブは定義可能か

バルトは物語の「リスト」を提示したが、そもそもナラティブとはどのようなものを指すのか、あるいは、どのような定義を与えることができるのであろうか。

ナラティブを厳密に定義するあるいは認識を共通にすることは非常に困難であると言わざるを得ないだろう。というのも、ナラティブを分析の対象として扱ってきたこれまでの研究から考えると、そのナラティブを分析の方法や視点と切り離して誰もが了解できるような「定義」を行うことが有意味でない場合もあるからである。

そのようなナラティブの定義をめぐる問題——定義の困難性——については、後述でその詳細を捉えることとし、現段階ではまず一般的に想定されるナラティブという言葉の表面上の意味を抑えたいうで議論を進めていきたい。

野口はナラティブを「物語」あるいは「語り」と訳することができると述べている（野口 2002 : 1, 2009 : 3）。その上で、ナラティブを日本語に訳さずカタカナで表記することについて「『語り』と訳すと『物語』という意味が抜け落ち、『物語』と訳すと『語り』という意味が抜け落ちてしまう」（野口 2009 : 1）からであると指摘している。そして、その両義性を保つためにナラティブというカタカナの表記を用いるとしている（野口 2009 : 2）。

本格的なナラティブ分析の教科書として位置付

けられる C. リースマンの *Narrative Method for the Human Science* (2008) の日本語訳版が出版されたのは 2014 年である（Riessman 2008 = 2014）。日本語訳版のタイトルは『人間科学のためのナラティブ研究法』となっている。Narrative がカタカナ表記でナラティブとされているのである。この例に見られるように、Narrative は現在ナラティブというカタカナ表記でその意味が理解されていると言える。これ以前からナラティブ——ときにはナラティブ——というカタカナ表記を冠する文献も多くみられる。

繰り返しになるが、ナラティブをひとつの意味に定義づけることは非常に困難である。というよりも、あえて定義しないあるいはそのつど意味づけることで研究としての発展があったと考えるべきかもしれない。

例えば、ナラティブの構造に着目した研究ではその構造上の特徴からナラティブを定義し、またナラティブの語するという行為の側面に着目した研究では相互行為的な意味合いで定義される。上述した C. リースマンの著作の中でもナラティブについて「単一の明快な定義は期待できそうもない」（Riessman 2008 = 2014 : 7）と述べられている。

C. リースマン（Riessman 2008 = 2014）は「テーマ分析」と位置づけられる研究を 4 つ、「構造分析」と位置づけられる研究を 6 つ、「対話／パフォーマンス分析」と位置づけられる研究を 3 つ、それぞれの代表的なものとして合計 13 のナラティブ研究を取り上げている⁴⁾。そして、それぞれの研究におけるナラティブの定義を取り出す。つまり、13 のナラティブの定義があるということであり、研究によってナラティブの定義が異なることを実際に認めているのである。ここにも「単一の明快な定義」を行うことの困難性が示されている。

2.2 ナラティブの特徴——物語論から考える

ここまででナラティブの「定義」が困難であることが確認されたので、いったんナラティブという言葉から離れ、物語という概念に注目したい。

4) 「ヴィジュアル分析」は、映像や絵画等を分析の対象としているためここでは除く。

というのも、ナラティブ分析の指南書でその定義をめぐって多く言及されるのが物語論 (Narratology) における物語の捉え方だからである。

物語論では、物語を時間的に秩序づけられた出来事のシークエンスとして扱ってきた (De Fina and Georgakopoulou 2012: 2)⁵⁾。これは、小説論の古典として知られるフォースターのストーリー (story) の概念に近い。フォースターは、ストーリーを「時間の進行に従って事件や出来事を語ったもの」(Forster 1927=1994: 40) と定義している。また、ストーリーと深く関係する概念としてプロットがあるが、これについては、ストーリーと同様に時間の進行に従って事件や出来事を語ったものであるが「事件や出来事の因果関係に重点が置かれ」(Forster 1927=1994: 129) たものとしている。

例えば、「王様が死に、それから王妃が死んだ」というのはストーリーで、「王様が死に、そして悲しみのために王妃が死んだ」というのはプロットとなる。

この定義に従い、井上は物語を「現実あるいは架空の出来事や事態を時間的順序および因果関係に従って一定のまとまりをもって叙述したもの」(井上 [1996] 2000: 158) としている。井上 ([1996] 2000) の主眼は、人びとの人生を物語の概念から読み解こうとすることであり、物語の定義をすること自体ではないが、以下の観点は今日まで物語 (ナラティブ) が注目されてきた理由のひとつを示していると言える。

私たちは、自分の人生をも、他人の人生をも、物語として理解し、構成し、意味づけ、自分自身と他者たちとにその物語を語る、あるいは語りながら理解し、構成し、意味づけていく——そのようにして構築され語られる物語こそが私たちの人生にほかならない (井上 [1996] 2000: 163)。

また、浅野 (2001) は、ナラティブという言葉ではなく物語という言葉を用いて自己論を展開さ

せているが、この自己物語論における物語はナラティブと置き換えることが可能である。その中であげられている物語の特徴は、(1) 視点の二重性、(2) 出来事の時間的構造化、(3) 他者への志向、の3つである (浅野 2001: 7-13)。とくに (2) 出来事の時間的構造化という特徴については物語論を概観する中から抽出されたものである点には留意したい⁶⁾。

これまで見てきたように、ナラティブの「定義」は困難であるが、それがどのように捉えられているのかを「特徴」としてあげることは可能である。井上 ([1996] 2000) の指摘から考えると、物語——ナラティブ——を分析することは、私たちが日常世界をいかに理解し意味づけているのかをまさに「理解」することに繋がっていると言える。ブルーナーの言葉を借りるならば、「ナラティブは人びと相互のコミュニケーションのあり方そして世界を経験する方法を形作るだけでなく、私たちが何を心描くのかそして何ができるのかという感覚の形式をも提供する」(Bruner 2010: 45)。つまり、私たちの日常世界に対する認識方法や対処方法がナラティブ分析から導かれると言えるだろう。この点には、結論部でまた戻ることにした。

ここからは、構造的ナラティブ分析とそれに関連する研究を取り上げながら、それらの成果について検討していく。

3. ナラティブ分析の系譜

ナラティブ分析にはふたつの源流がある。

ひとつは、社会学や心理学で「人」に中心を置くバイオグラフィーやライフヒストリー研究の流れである。もうひとつは、物語論に位置づけられるもので、(ロシア) フォルマニズムや(フランス) 構造主義の流れである (Squire, Andrews and Tamboukou 2008: 3)。

このふたつの流れは別々に展開されてきたというよりも、前者が後者の概念を参照しながら発展してきたと考えられる。その状況について、いく

5) 物語論においては、分析の対象としてテキスト (書かれたもの) を扱っている場合が多く、「語り」という行為の側面への関心が低い。

6) 浅野 (2001) も井上 (1996) を参照している。

つかの研究と動向を年代順に見ながら確認していく。

3.1 ナラティブ分析の試金石⁷⁾

ナラティブ分析の初期の成果として参照されることの多いラボフとウォレツキー (Labov and Waletzky 1967) の研究を概観することからはじめたい。この研究は、当時において先駆的な研究であり、その後のナラティブ分析に大きな影響を与えたものである。

この研究ではナラティブの構造に注目するという視点が非常に強い。このラボフらの発表した論文 *Narrative Analysis: Oral Versions of Personal Experience* では、「死ぬほど危険な状況になったことがあるか」という質問を行い、それに対する回答を「節」(clause)に分けてその構造が分析されている。

その分析の手順は、書き起こしたナラティブを節に分けたのち、その節を入れ替えたり再構成したりしながら、それぞれの節の機能を確認するというものである。この論文の中心は、ナラティブの構造を明らかにすることであり、そのナラティブの内容にはほとんど関心が払われていない。また、インタビューが相互行為であるという視点も取られていない。のちにこれらの点が批判されることとなる (桜井 2012)⁸⁾。

この分析により明らかになったのは、ナラティブが、導入 (orientation)→複雑化 (complication)→評価 (evaluation)→解決 (resolution)→終結

(coda) という構造を持つということである。つまり、このような構造をもつものがナラティブである——ナラティブのひとつの定義となる——ということが結果的に示されたのである。言い換えるならば、ナラティブの定義が結果から遡及的に導かれたということである。

導入 (orientation) とは、人物、場所、時間、状況に関する節である。複雑化 (complication) とは、行為の詳細についての節である。評価 (evaluation) は、導入および複雑化を含む語りに対する語り手自身による考え (考え方) についての節である。解決 (resolution) は、行為の結果どうなったのかということに関する節である。終結 (coda) は、解決のその後「現在」への言及の節である。

ラボフらの分析の方法は、サックスから始まる会話分析の手法に非常に近い視点をもっている⁹⁾。それは、会話の構造に注目するという点である。

サックスが大学で会話分析の講義を始めたのは1964年であるので (鈴木 2007: 9)、ラボフらの研究の方が後になる。この会話分析と構造的ナラティブ分析は全く別の発展を見せていった。しかしながら、このふたつの分析はいくらか関係があるようである。

1972年に刊行された *Language in the Inner City* (Labov 1972) では、サックスとシュエグロフが参照されている¹⁰⁾。この同じ年に刊行されたサドナウ編の *Studies in Social Interaction* で、サックス

7) この「試金石」という表現は C. リースマンによるものである (Riessman 2008 = 2014: 157)。

8) また、この論文中には conversation という言葉は使われていない。桜井 (2012) のラボフへの批判のとおり、1967年の論文では相互行為的な視点は取られておらず、また自身らの調査者への聞き取りについてもインタビューという言葉を用いていない (Labov and Waletzky 1967)。この後会話分析との関係に関する記述で確認することになるが、ラボフはゴフマンの影響を受け相互行為という視点をもつことになる。また、その影響を受けた論文においては、自身の調査についてインタビューという言葉を用いている (Labov 1982)。

9) 会話分析の詳細については、Sacks (1965 = 1995) および Sacks, Schegloff and Jefferson (1974-1977 = 2010) を参照されたい。

10) ラボフが参照しているのは *Studies in Social Interaction* 内のサックスおよびシュエグロフの論考であるが、参考文献リストではこれらは1969年と記載されている。しかしながら、*Language in the Inner City* 本文中では1972年の表記になっているため (Labov 1972: 298)、参考文献リストの誤植と思われる。また、参照されているサックスの論考のタイトルが、*Studies in Social Interaction* 中のものとは別の表記になっている。この書内でサックスが寄せている論考は、An Initial Investigation of the Usability of Conversation Data for Doing Sociology および Notes on Police Assessment of Moral Character の2本であるが、ラボフは The Research for Help と記載している。また、*Language in the Inner City* 中にはサックスの未刊行の講義内容が参照されており (Labov 1972: 224)、ラボフが会話分析研究者と親交があったことが伺える。

とシェグロフ、ラボフはともに論考を寄せている (Sadnow 1972)。

1967 年のラボフらの研究と 1982 年のラボフ単独の研究のふたつには、会話分析を直接に参照した形跡はない。しかしながら、1972 年の「共演」は両者——構造的ナラティブ分析と会話分析——が共通にしている視点の存在を意味していると考えられるだろう。

また、ラボフとサックスの両者がゴフマンを参照している点は興味深い。1967 年の時点では使用されることのなかった相互行為 (interaction) という言葉が 1982 年の段階になると数カ所に見られるようになっていく。この点については、ラボフ自身がゴフマンの影響があったことを記述している (Labov 1982: 244)¹¹⁾。

3.2 物語論と構造主義

時代は前後するが、物語の構造の研究は 1920 年代のロシアフォルマニズムに遡ることができる。プロップの『昔話の形態学』がその発端とされるが、この研究が非常に注目されるようになるのは英語版翻訳が発表された 1958 年——30 年後——になってからである (Adan 1984=2004: 10)。そして、のちに (フランス) 構造主義と呼ばれる潮流に大きな影響を与えることとなる。

ラボフらがナラティブの構造への注目を提起したのが 1967 年であった。

その頃、物語の構造分析を行っていたひとりとしてバルトがいる¹²⁾。「物語の構造分析序説」がフランスで発表されたのは 1966 年であり、またこの方法をベースとした実践として位置づけられる「天使との格闘——『創世記』32 章 23-33 節のテキスト分析」が論文として発表されたのは 1971 年である (花輪 1979: 201)。

バルトは、ロシアフォルマニズム (物語論) や記号学の影響を大きく受け、その流れの中で上記の論文を発表した。ただし、これらはあくまでも物語論の文脈での成果であり、バルトの主眼はテキスト——書かれたもの——の分析である。

よって、本稿においてバルトを取り上げることには脱線していると思われるかもしれない。しかしながら、この盛り上がりがその後のナラティブへの注目をさらに高めることになるのである。

1979 年シカゴ大学でナラティブ——Narrative: The Illusion and Sequence——と題するシンポジウムが開かれている。このシンポジウムの成果をまとめたエッセイ集が刊行されているが、その巻頭において「ナラティブ研究はもはや心理学や言語学から言葉を借りているような文学の専門家や民俗学の研究者といった垣根を越え、今や人間科学・自然科学すべての学問のための明確な洞察につながるものとなった」(Mitchell 1980: 3) と宣言されている¹³⁾。

物語論は、テキストという文字で書かれたものを分析の主な対象としてきたが、日常的な会話やインタビュー調査といった口述の資料の研究成果にも関心を払うようになる。

アダンが物語論の系譜を大胆にまとめあげる作業の中で、ラボフの研究に何度も言及している (Adan 1984=2004)。その中で、ラボフのナラティブの定義については批判的な態度を示しつつも、一連の研究成果について好意的である (Adan 1984=2004: 146)。ラボフは口述のデータからナラティブについて分析と考察を重ねたが、その成果にはテキストを主な分析の対象としてきた物語論にも還元可能な要素が含まれていた。それこそまさに「構造」である。口述と筆記という分析対象の差異を問題にするのではない、ナラティブとその構造という言葉でこの垣根を超える研究の視座が示されたと言えるであろう。

3.3 構造的ナラティブ分析のその後

さて、時間をミッチェルの宣言の直後——1980 年代——に戻そう。

物語論の系譜から物語への関心が高まる中、先述のラボフらの構造的ナラティブ分析は、その後の研究にも引き継がれている。しかしながら、ラボフらの分析とは異なる視点も導入されることに

11) また、この 1982 年の論文には conversation あるいは conversation turn という言葉も使用されている。

12) バルトが言う物語とは recit であり、ナラティブよりストーリーと訳する方が適切であるだろう。

13) このシンポジウムにはさまざまな領域の研究者や専門家が集まっているが、その中にはデリダやリクールもいる。リクールもまたその後の物語への注目を高めた人物のひとりである。

なる。

ジー (Gee 1985) は、*The Narrativization of Experience in the Oral Style* でラボフの成果にさらに「連」(stanza) という概念を導入した。連(stanza)とは、内容やトピックのまとまりのことを指す。この論文では、7歳の黒人の女の子の日常の話(父親や飼い犬のことなど)が分析されている。そして、口述(oral)の文化と筆記(literal)の文化との差異を論じようと試みた。C. リースマンは、このジーの研究をラボフの構造的ナラティブ分析を発展させたもののひとつとして取り上げている(Riessman 1993、2008=2014)。

ジーとラボフのもっとも異なる点は、ラボフがナラティブのその構造にのみ目を向けていたのに対して、ジーはナラティブの内容にも目を向けたことである。会話に登場する「父」をめぐるナラティブには権威あるいは大人の世界と結びつく単語が用いられ、「飼い犬」をめぐるナラティブには自由あるいは子どもの世界と結びつく単語が用いられているという分析がなされる¹⁴⁾。ナラティブの内容へ関心を示し、それが「解釈」されているのである。

ナラティブの構造と内容を切り離さず分析を行い、それにある特定の意味づけをしていくという方法は、この後のナラティブ分析の主流となっていく。この方法は社会学には一番馴染み深いものであるだろう。語り手のナラティブを分析し、そのナラティブに「隠れた物語」があるという発想であり、それを発見することが(分析者の)ひとつの「仕事」であるという観点である¹⁵⁾。

1998年に「社会学者はなぜナラティブに関心

をもつべきか」と題する論文が発表されている(Franzosi 1998)。この論文の中でひとつの事例として妻から家を追い出された夫のナラティブが取り上げられている。

ここでは、①順序、時間、頻度、②言葉遣い、③語られているその内容、が分析の際に取り上げられるべき視点として挙げられている。①の時間の概念は、ラボフの分析で取り上げられているナラティブの要素である。②の言葉遣いは、ジーの分析で取り上げられている点と重なる。③の内容については、ウィリス(Willis 1977=[1985] 1996)の方法と酷似している。「なぜナラティブに関心を示すべきか」という問いの答えは、ナラティブが社会関係の形式を示しているからであり、だからこそナラティブを分析するのであると結論づけられている(Franzosi 1998: 548)^{16), 17)}。

しかしながら、このナラティブを分析することが社会関係を明らかにすることになるという観点は構造的ナラティブ分析のそれとは異なる。フェミニズム研究が旺盛になる過程においては、確かに、この観点は非常に有効であったように思われる。声を持たない人びとが押しやられている社会関係について、実際の声——ナラティブ——に関心を払うことでそれを告発してきた。

ラボフの構造的ナラティブ分析は、それらの研究において非常に強力な後押しとなったが(Riessman 1993)、そもそもラボフが提起したものはこのような観点だったのであろうか。そこで、以下ではもう一度ラボフの最初の研究に立ち返り、その意味について検討していく。

14) 先述したように構造的ナラティブ分析は会話分析と似た視点を持つことを指摘しうるが、ジーのこの観点も同様である。会話分析では、ある特定のカテゴリーの成員にはそれに適切な活動が紐づけられるかたちで参照されることが指摘されている。

15) 1977年に発行された *Learning to Labour* (『ハマータウンの野郎ども』日本語訳 1985年) はその代表的な研究のひとつとして位置づけられるだろう。労働者階級の再生産の過程が、その子どもたち(青年たち)のナラティブから明らかにされている。マルクス主義的世界観を背景にしつつ、その社会構造がいかにして維持/再生産されているのかを論じたこの著の特徴のひとつは、ナラティブの「解釈」の問題であると考えられる。つまり、本人たち(語り手)のナラティブが既存の社会構造の再生産的な側面をもつという「隠された物語」を分析者が明らかにしているのである。当の語り手たちが知らずにいる「事実」を描き出すという作業は、その後もナラティブ分析に引き継がれていると考えてよいだろう。

16) これは、ウィリスが明らかにしたことと同様であると言える。

17) さらにこの論文では、(分析者の)「解釈」の問題についても触れられている(Franzosi 1998: 545-7)。私たちがナラティブの意味を理解あるいは把握するには、背景に関する情報(例えば、民族構成や失業率などの統計的な情報)が必要であり、それに基づき(意識的であれ無意識的であれ)分析は行われるというのである。

4. ラボフが提起したもの

先に触れたようにラボフらの研究 (Labov and Waletzky 1967) は、ナラティブ分析の試金石として今日も援用されるものであるが、これに対する批判的評価も存在する。

C. リースマンは、ラボフの一連の研究成果について「ラボフの理論および彼が分析している比較的単純なストーリーは、主観的経験を捉える十分なモデルを提供しているとは言い難い」(Riessman 1993: 51-2) としている。一方で、自然発生的な会話を分析するのにこの方法が適しているとしている (Riessman 2008 = 2014: 192)¹⁸⁾。

ラボフが明らかにしたナラティブの構造を見るという観点が想起させる最大の問題は、この構造があたかも「よい」ナラティブの構造を示しているかのように受け取られる可能性が含まれていることであると考えられる。ラボフの提示した構造をナラティブの「模範」として扱いながら分析に適用し、それに当てはまらないものをときに「逸脱した」あるいは「悪い」ナラティブとして描き出してしまうということである。

ラボフはナラティブのひとつの構造を抽出したが、それはあくまでも分析の結果導き出されたものであり、それが「模範」であるあるいは「よい」ナラティブとして提示してはいない。

この点について、パターンソン (Patterson 2008) が非常にわかりやすい指摘をしている。彼女は、「『よい』ナラティブとはラボフのモデルに一致するものであり、それはこのモデルに一致しないナラティブが能力のない語り手によって生み出されてきたことを暗に示している」(Patterson 2008: 31) という誤解が生まれていると言う。また、続けてラボフのこれまでの成果について、「このような指摘はラボフの研究および能力についての考え方の純粋な解釈から離れすぎている。彼は『よい』あるいは『悪い』ナラティブについての一般的な判断を煽ろうとしていたのではなく、むしろ、

彼が観察しえた異なる階層や民族間で生み出されたナラティブの差異を社会言語学的な説明によって詳述した」(Patterson 2008: 31) のであると述べる。

近年、物語能力が教育の現場において問題となっていることに本稿の冒頭で触れたが、ラボフの問題意識がこの物語能力と関係していることが、上記のパターソンの言及を理解する助けとなる。多民族で構成されるあるいは多言語が使用される社会において、「言葉」は大きな問題となる。C. リースマンは、自身の孫の授業参観において「私のナラティブを書く」という授業が行われている現場を目にしたという (Riessman 2008 = 2014: 3)。そこには、ある一定の形式——構造——を守って書くことが教師により板書で指示されていた。このエピソードは、ラボフの最初の研究から約 30 年経った現在において、ナラティブの形式——構造——が重要であり続けていることを示している¹⁹⁾。

ラボフのナラティブの構造への着目は、多民族・多言語が共在している社会状況に限ったことではなく、ナラティブにおいて「模範」が重要視される今日の社会への問題提起だったのではないだろうか。言い換えるならば、特定の形式に則ったナラティブが力を持つてしまうことへの警鐘だったのではないかということである。

5. 構造を分析する意味

これまで、ナラティブ分析とくに構造的ナラティブ分析を取り上げて論じてきた。最後に、ラボフの最初の研究結果を別の視点から考え直したいと思う。

ラボフは初期の研究において、ナラティブの「内容」よりむしろ「構造」を見ることを提案した。この発想それ自体が喚起する問題を考える必要がある。

ラボフはナラティブの構造を明らかにするために、ナラティブを節に分けたうえで並べ替えたり

18) ラボフが会話分析研究者らと親交があったということも思い起こす必要があるだろう。

19) ドブソン (2005) は、教育においていかに物語能力が重要視されているかをメディア環境の変化も含めて論じている。

再構成したりするという方法を取った。この方法が可能であるということは、つまり、ある（あるいは複数の）出来事についてのナラティブにはいくつかのバージョンがありうることを示している。

あるナラティブには、他にもあり得たはずの者たちがある。これは、ナラティブの「語り」という行為の側面を相互行為の文脈から考えるとわかりやすいかもしれない。C. リースマンは、ジェニルスチルベストロール²⁰被害者の語りを分析したベルの研究（Bell 1988）に対して、同じ指摘を繰り返す。それは、異なる相互行為——インタビューの際の話の聞き方——によってまた異なるストーリーや説明が生み出されるのではないかというものである（Riessman 1993 : 41 ; 52）。

ただし、ここで問題にしたいのはナラティブ——あるいはその中の出来事——の「真実性」の問題ではない。ナラティブ分析において重要であるのは、出来事それ自体、その意味づけ、順序、つながりなどの語られ方ではないかということである。その出来事の「内容」ではない部分、つまりそのナラティブの「構造」がある特定の機能をもっていることが、この「構造」を分析する方法を採用するひとつの理由であると考えられるのである。

ナラティブは、ある特定の形式によってあらわされるときにまさに生きられた意味を帯びる。「生きられた」というのは、そのナラティブが自分のみ理解可能なものとしてではなく、他者とも共有可能になりうるように開かれているということである。

例えば、経験の共有というのは単に同じような出来事に遭遇したことがあるということで可能になっているだろうか。言い方を換えてみるならば、同じような出来事に遭遇したことがなくとも経験を共有するということはある。経験という他者のナラティブを理解する——共感でなくとも表面上の意味だけを理解する場合も含む——ことが可能であるのは、そのナラティブの形式——構造——が自分のそれと同じあるいは酷似してい

るからではないだろうか。物語能力を向上するための教育が行われているのは、人びとのナラティブの形式をある程度均一化して汎用性を高めるためであると考えられる。人びとの間である特定の説明の形式が利用可能であることが、自身と他者——社会——とのつながりの担保となっているのである。

6. おわりに

そもそも構造的ナラティブ分析が可能となったこと自体が、何より、私たちが物事の説明の理解に対して構造を用いて接近していることを示している。このことはまた、いくつかのある特定の説明の形式が流通し、それらからはずれているものが説得性を持たないものと評価されたり、有意味でないものと判断されたりしてしまう危険性があることをも示唆している。何かについて話す／記述するときに、出来事や行為が複数登場する場合は時間的順序に従う、あるいは、原因と結果をはっきりと示すなどが「模範」とされ、それらから「逸脱」しているものを物珍しいものとして扱う。ラボフの提起した問題はまさにこのような事態だったのではないかと考えられる。「よい」ナラティブ／「悪い」ナラティブといったような二元論的思考に還元されないナラティブがありうることを私たちは考えなければならない。私たちの日常生活世界に対する認識方法や対処方法がナラティブにあらわれているということは、ナラティブについての二元論的思考がそれらに対するある種の判断に通じているということに注意を払わなければならない。

本稿の冒頭に戻るが、近年のナラティブへの注目とナラティブ研究の展開は、新たなナラティブへの「探求」という意味が含まれているように思われる。これは、研究という領域に限ったことではない。私たちは日々の生活の中にあふれるナラティブと接することによって、日常的にこの「探求」という行為を実践していると言えるのかもしれない。

20) Diethylstilbestrol (DES)。アメリカで1940年から1971年にかけて流産防止のために処方されていた合成ホルモン。

最後になるが、質的研究における方法論について、その対象と切り離して理論を展開することは困難が伴う作業であるということを記しておくたい。しかしながら、方法論についてのテキストもまたナラティブであり、その意味において本稿もまたひとつのナラティブ分析である。

参考文献

- Adan, J., 1984, *Le recit*, Presses Universitaires de France.
(=2004, 末松壽・佐藤正年訳『物語論——プロップからエーコまで』白水社.)
- 浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』勁草書房.
- Barthes, R., 1961-71, *Introduction a L'analyse Structurale des Recits*, Seuil. (=1979, 花輪光訳『物語の構造分析』みすず書房.)
- Bell, S., 1988, "Becoming A Political Woman: The Reconstruction and Interpretation of Experience Through Stories", *Gender and Discourse: The Power of Talk*, Todd, A. and Fisher, S., eds., Ablex Publishing Corporation.
- Bruner, J., 2010, "Narrative, Culture and Mind", *Telling Stories: Language, Narrative and Social Life*, Schiffrin, D., De Fina, A. and Nylund, A. eds., Georgetown University Press, 45-49.
- De Fina, A. and Georgakopoulou, A., 2012, *Analyzing Narrative*, Cambridge University Press.
- Dobson, S., 2005, "Narrative Competence and the Enhancement of Literacy: Some Theoretical Reflections", *International journal of media, technology and life learning*, 1(2): 1-14.
- Forster, E., 1927, *Aspects of the Novel*, Edward Arnold.
(=中野康司訳, 1994, 『小説の諸相』みすず書房.)
- Franzosi, R., 1998, "Narrative Analysis: Or Why (and How) Sociologist should be interested in Narrative", *Annual Review of Sociology*, (24): 517-54.
- Gee, J., 1985, "The Narrativation of Experience in the Oral Style", *Journal of Education*, 167: 9-35.
- 井上俊, 2000, 『スポーツと芸術の社会学』世界思想社。
- Labov, W. and Waletzky, J., 1967, "Narrative Analysis: Oral Versions of Personal Experience", Helm, J. ed., *Essays on the Verbal and Visual Arts*, University of Washington Press, 12-44.
- Labov, W., 1972, *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*, The University of Pennsylvania Press.
- , 1982, "Speech Actions and Reactions in Personal Narrative", *Analyzing Discourse: Text and Talk*, Tannen, D., ed., Georgetown University Press, 219-47.
- Mitchell, W., 1980, "Editor's Note: On Narrative", *Critical Inquiry*, 7(1): 1-4.
- 野口裕二, 2002, 『物語としてのケア——ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院。
- , 2005, 『ナラティブの臨床社会学』勁草書房。
- 野口裕二編, 2009, 『ナラティブ・アプローチ』勁草書房。
- Patterson, W., 2008, "Narrative Events: Labovian Narrative Analysis and its Limitations", *Doing Narrative Research*, Squire, C., Andrew, M. and Tamboukou, M. eds., Sage Publications, 22-40.
- Prince, G., 2003, *A Dictionary of Narratology Revised Edition*, University of Nebraska Press. (=2015, 遠藤健一訳『改訂 物語論辞典』松柏社.)
- Riessman, C., 1993, *Narrative Analysis*, Sage Publications.
- , 2008, *Narrative Method for the Human Science*, Sage Publications. (=2014, 大久保功子・宮坂道夫監訳『人間科学のためのナラティブ研究法』クオリティケア.)
- Sacks, H., 1972, "An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology", Sudnow, D. ed., *Studies in Social Interaction*, The Free Press, 31-77. (=1995, 北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法——会話分析始め」『日常性の解剖学』マルジュ社, 93-173.)
- Sacks, H., Schegloff, A. and Jefferson, G., 1974, "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking in Conversation", *Language*, 50(4), 696-735. (=2010, 西阪仰訳「会話のための順番交替の組織——最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集——順番交替と修復の組織』世界思想社.)
- Sadnow, D. ed., 1972, *Studies in Social Interaction*, The Free Press.
- 桜井厚, 2012, 『ライフストーリー論』弘文堂。
- Seikkula, J. and Arnkil, T., 2006, *Dialogical Meeting in Social Networks*, Karnac Books Ltd. (=2016, 高木俊介・岡田愛訳『オープンダイアログ』日本評論社.)
- Squire, C., Andrew, M. and Tamboukou, M., 2008, "What is Narrative Research?", *Doing Narrative Research*, Squire, C., Andrew, M. and Tamboukou, M. eds., Sage

Publications, 1-21.

鈴木聡志, 2007, 『会話分析・ディスコース分析——こ
とばの織りなす世界を読み解く』新曜社.

Willis, P., 1977, *Learning to Labour: How Working Class*

Kids Get Working Class Jobs, Ashgate Publishing. (=
[1985] 1996, 熊澤誠・山田潤訳『ハマータウンの
野郎ども』筑摩書房.)

Rethinking of Narrative Analysis:

Focus on Narrative Structures

ABSTRACT

This paper aims to rethink narrative analyses through examining the genealogy of this methodology. In recent years, “narrative” has become a notable word in various fields. The shift in perspective from evidence-based medicine to narrative-based medicine is emerging in medical care. The importance of narrative competence in students is discussed in pedagogy. Life history/life story studies in sociology can be broadly situated in narrative analysis. I will deal with analyses of narrative structures, because the perspective of these analyses holds a warning for our society. Analyzing narrative means to think of how we understand of our real lives. And narrative analysis is an activity to explore yet undiscovered narratives.

Key Words: narrative, narrative analysis, narrative structure